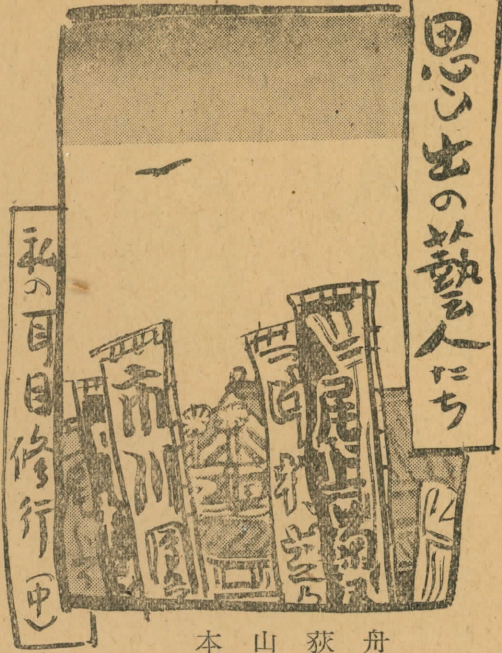


思ひ出の執行人たち



舟山本

わたしの人形淨瑠璃に對する思ひ出は、更に古く淡路の上村源之丞一座にさかのぼることになる。浅瀬を教へられた漁師を斬つて、

力よりも、地方の限りある觀客層に對し、競走者の方で避けたのかも知れない。

享保年代には五十八座あつたといふ淡路人形が、明治以後だん／＼戦後その供養のために建てたといふ退したといつても、わたしがふ寺で、三十三年目毎に行はれる十一二の二十四五年頃までは、な本尊觀世音の開帳に、必ずかゝるは三十餘座を存した中に、最も評のが仕來りといふのだから、三十判のよかつたのはこの一座で、わ三年に一度の興行で、それにうま

狂言は三四日替りで、半月位打たといふことを教はつたのも、その時であつたかと思ふ。岡山には前後十餘年も住つたので、わたしの耳目修行はそこから始まつたわけだが、「目」の方に當時大阪からたまに來る右團次

くぶつかつたわけだが、當屋」や「安達原」など、かすかに時淡路人形といへば、どこ記憶に残つて居り、最後の出し物でも源之丞が著聞してゐるたる「忠臣藏」の通しは、比較的なので、いろ／＼の源之丞が印象が深かつたと見えて、七段目現はれてゐたさうだけれど、の茶屋場で由良之助の讀む文が、わたしの郷里あたりでは天紅で長く垂下つたことや、八段「上村」でないこと承知しなかつた。ムシロ張りの掛小屋に櫓を上げて、猖々緋の幕を張り「諸藝諸能之冠」とて現はれた姿など、今でもまざまいふ額を掲げ、槍を立てゝ威勢を張つてゐた。この額が掲げられると、二里四方の道具のケレンもその頃から行はれ音曲停止の定めといふので、その時も文字通り暫行されてゐたが、これは禁制の威當時の人氣者だつたらしく、眞赤

(齋入)・福助(先代梅玉)・鷹治郎(先代)等それらの一座に、新派の角藤定憲・山口定雄・岩尾慶三郎・木村周平・木村猛夫・山岡如萍・秋月桂太郎・小織桂一郎といった人々が、合同したり離れたりして来る以外、交樂や堀江の巡業は、殆んど全部が素淨瑠璃だったから、自然いくらか「耳」の方が先に肥えたことは争はれず、かつ人形がなただけに、語り物は毎晩替りだから、同じ太夫でも番數を多く聴き得るといふ便宜はあった。随つて當分は主として「耳修行」であつた。

女義太夫は呂昇の賣出し當時でやつと二十を出たばかり、文字通り娘時代の人氣盛りであつたが、併稱された長廣のいくらか濫い語り口に對して、美音に任せる呂昇の節廻しは、唄ふ淨瑠璃として當初からあまり喝采しないことを以て、通と心得るやうな生意氣に早くから感染してゐた。もつとも長

廣の出身地が岡山在といふやうな土地びいきも手傳つてゐたことは争はれなかつた。そしてこんな風のことは、かなり後まで影響して東京の女義太夫など聴く氣がせずつひにいはいゆるドウスル連には、ならすしまひでその時代を經過した。

最も印象に残つてゐるのは、攝津大塚よりも大隅太夫(先代)の方だ。減多に巡業に出ない大塚よりは、聴く機會の多かつたせいもあるが、前にいつた語り口に對する先入感が、主なる理由であつたことは是非がない。明治三十一年に致した名人團平の三味線はつひに聴く機會を得なかつたが、三代大隅を初めて聴いたのはそれから間もなくで、大正二年臺灣で客死した時が六十歳だから、當時は四十六七、自分の藝としては油の乗りであつたはずだが、まだ十代だつたわたしには、もう相當な老人のやうに思はれた。

何でもその頃天聽淨瑠璃の計畫が大味で評判にならず、三枚目を語があつたのに、藝は兎も角も、あつてゐた春子太夫(二代)が地方の苦面をお目にかけるのは恐縮だとかで、中止になつたといはれる位、かなり怪奇な容貌の持主が、得意の『合邦』で「かゝさん、こら、明けて……辻でござんす」といふ玉手のコトバに、何ともいへない色氣とあどけなさのあつたのが、後まで同聽仲間の語り草になり、いまもまぎ／＼と耳に残つてゐる。その後七五三太夫(先代)と同じ語り物で、例の大音聲にかゝはらず、こゝがまた繊細な色氣でどっちがよいなど、比較されたものだが、やはり大隅に團扇の上つたことはいふまでもない。

格幅がよくて聲量があり、いはゆる大物語りといふ風格に於いて大隅はいふまでもなく、七五三太夫なども好きな太夫で、來る度に待設けて缺かさず聴いた。大隅のモタレに大島太夫といふのがゐる柄も語り口も似てゐたが、これはですつと褒め方に廻り、五郎は十



郎と分離獨立後、平押しに出る壓  
倒的精力に根負けしたと、當人に  
も語つた位だし、殘る春子太夫だ  
けは、長い間打絶えてゐたところ  
大正も十餘年を過ぎて、震災前の  
有樂座に上つたのを、久々で聴い  
た時の語り物が、やはりおはこの  
『酒屋』で、美男の面影は存しな  
がら、頭髮のほとんど白化したと  
共に、態度のキザツばさがすつか  
り洗はれ、持前の難聲にはサビが

もさも楽しさうに、しまひにはヨ  
ダレをたらしながら語つた。それ  
でゐてにじみ出る滋味に、いつの  
間にか引入れられたのだから、今  
から考へるとわたしの耳修行には  
かなり影響を興へてくれたやうに  
思ふ。後に文樂へ入つて六代目彌  
太夫になつた長子太夫も、大團の  
一座でよく聴いた。花は乏しいが  
手堅い語り口で、折々後の中車を  
連想したことがある。

のか、あるひはいはゆる大物を早  
くから多く聞き馴れたためか、節  
をころがす艶物よりも、どツしり  
と筋を語る時代物の方が好きで、  
かなり傾倒した大團さへ、評判の  
『壺坂』なんか世間で騒ぐほどは  
高く買へなかつたのだから、伊達  
や春子を好まなかつたのも、そん  
なことがもとであつたらしい。

語り物は得意の一つたる『酒屋』  
であつたが、以前聴いた時分よ  
りは、すでにいさゝか艶が落ち、  
一般の評判はかつての名人會時代  
にくらべて、よほど下り坂のやう  
だつたけれど、わたしにはその平  
淡に入りかけた傾向が、先入感の  
イヤミから遠ざかつたやうで、い  
さゝか聴直したことだけは確かだ  
し、後年土佐太夫になつてからの  
枯淡味を珍重するに至つた機縁は  
この時に發したと思はれるにつけ  
ても、自分は何といふツムジ曲り  
であらうと、つく／＼昔が顧みら  
れてならぬ。(つゞく)

加はつて、枯れた語り口にイヤミ  
がなく、鍛へた藝に獨特の持味が  
しみ／＼とした哀感をそゝつて、  
以前反感を持つたゞけに、一層な  
つかしく思つたが、評判はあまり  
パツとしなかつた。

美音の艶語りで、春子太夫と人  
氣を競ふた伊達太夫(土佐)を、  
わたしはまた好まなかつた。春子  
の方は態度に關する反感であつた  
が、伊達のは浮めて唄ひ廻すやう  
な語り口に同感ができないのだつ

明治四十二年に有樂座の出來た  
當時、わたしは二度目に上京して  
そのまゝ居つてゐるのだが、  
そこで久しふりに伊達太夫を聴い  
た。一緒に机を並べていた岡村柿  
紅君と、偶然義太夫談の出た時、  
ちやうど有樂座に伊達がかゝつて  
ゐて、同じ土佐の出身だし、親戚

關係もあつたのを、そなことは  
知らないから、わたしは嫌ひだと  
いふと、さういふ批評もあるけれ  
ど、あれでなか／＼よいところも  
あるから、一度聴直してやつてく  
ればといはれて、むしろ新様式の有  
れてならぬ。(つゞく)

新靱といふ老練な太夫も、當時  
よく巡業して來た。『阿漕』が得  
意だつたらしく、幾度聴かされた  
かわからないやうな氣がする。老  
年でもあつたし枯れた藝で、ほと  
んど艶はなかつたけれど、自分で

た。明治三十五年頃、東京で名  
人會など、稱し、伊達の評判が高  
いのを見たり聞いたりして、淨瑠  
璃に對する東京人の耳を輕蔑する  
と、あれでなか／＼よいところも  
あるから、一度聴直してやつてく  
ればといはれて、むしろ新様式の有

でお耻かしいが、實は性癖といふ  
れといはれて、むしろ新様式の有  
れてならぬ。(つゞく)

であらうと、つく／＼昔が顧みら  
れてならぬ。(つゞく)